



NPO法人体験型安全教育支援機構



Institute of Safer Town Environmental Program

日本女子大学学術研究員・株式会社ステップ総合研究所所長  
NPO法人体験型安全教育支援機構代表理事 清永奈穂【博士（教育学）】

## 安全教育の5つのポイント

①発達段階に沿った内容②体験型での実施③教科横断型④インクルーシブな防犯  
防災教育の実施⑤保護者や地域を巻き込んだ安全教育の実施

発達段階に即し意図的計画的に危機遭遇場面をデザインした「各種危機体験型安全教育」（体験型安全教育施設）の制度的実現を進める必要がある。この危機体験型安全教育では、様々な危機、たとえば災害、犯罪（性被害やインターネット、薬物など含めて）、家庭での事故、交通事故、いじめなどに関して、幼児から高校・大学まで自助・共助・公助について学ぶことができ、また保護者の体験教育も（事故防止や虐待防止も含め）可能である。ここでは、障がい児や、外国人児童等へのインクルーシブな防犯・防災教育など一人一人が安全安心に生きていくために共に学びあうことができる。



1

安全教育は「教育」  
＝大人へと育てる安全教育 「危機を通して大人を育てる」

①危機を克服する知恵を備え（危機の実際は、起きた時の状況などにより刻々と変化する。変化する問題に応じ、それを実際に乗り越える複数の知恵が必要）

②その複数の知恵の中から今一番必要とされる知恵を選び取る決心、勇気を持ち

③自分が選んだ知恵を実際に行ったら、その結果に責任をもてる人間

・つまり、危機を通した安全教育は、人間の在り方として最も基本的な要素、問題解決の選択肢を養い、その知恵を自分で選び、そして選んだことに責任をもてる、という3要素を身に付け鍛える（学び、考え、周囲と共に体験することで身に付けていく）  
「自分や周囲の人の命」をかけた貴重な学び

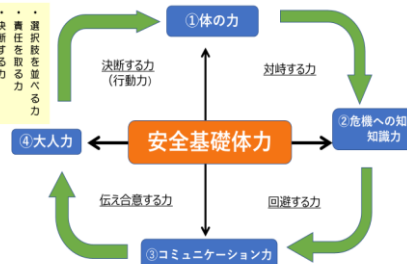


2

## 安全基礎体力

危機を超えるための単なる「技（英国の安全教育でいうskills）」の体得だけでなく、その危機を乗り越える体の力（身体能力）に加え、

- 危機への知恵知識を基に、
- コミュニケーション力、
- 危機を解決するための方策を自分で選び並べられる力（自己配列力）
- その選ばれた複数の解決法を絞り込んで行く力（自己選択力）
- その絞り込んだ力の中から一つを最終的に選び行動を決める力（自己決定力）
- そうした行動の結果に責任を追うことができる力、逆に言えば責任感を持って行動することのできる力（自己責任力）を持った人間、即ち「大人」を育てることが不可欠



3

3

犯罪を含めあらゆる危機は、その問題解決のため、危機遭遇前の学びにより蓄積していた解決に必要な知識/教養を並べてみることを迫り、その知識/教養の中から最適な答えの一つを選び、それを実行する、その実行した結果に対し責任を負うという個人の「力」の所持と発揮を、その人（個人）に「命を懸け」そして「言い逃れしようもなく」迫る。

・危機は厳しく「人間として大人として生き続けるための、取らねばならない行動」を迫る。

・これからの多様な変革(日常生活の危機)に満ちた新しい時代に立ち向かい、社会の一員としての「大人としての自覚」を紡ぎ、その知恵を体得し行動できる人間づくりが、これからの社会では必要とされると思われる。

・新しい時代に応じた危機を乗り越える力、すなわち危機のその時に、互いに尊重し合いながら力を合わせて乗り越える力、すなわち大人の知恵と大人の力をつけて行く教育が必要。

・こうした子どもの心的社会的態度を英国のシティズンシップ教育では「依存」に対する「自立」と表現するし、文科省は「主体的」と呼んでいる。

○ 出典：清永奈穂「犯罪から子どもを守る安全教育指導プログラムの開発とその効果に関する基礎的研究—小学校における体験型安全教育の構築を目指して—」2022、博士論文（日本女子大学）

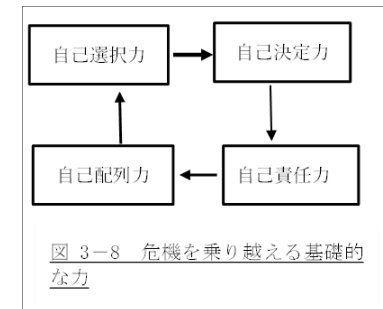


図 3-8 危機を乗り越える基礎的な力

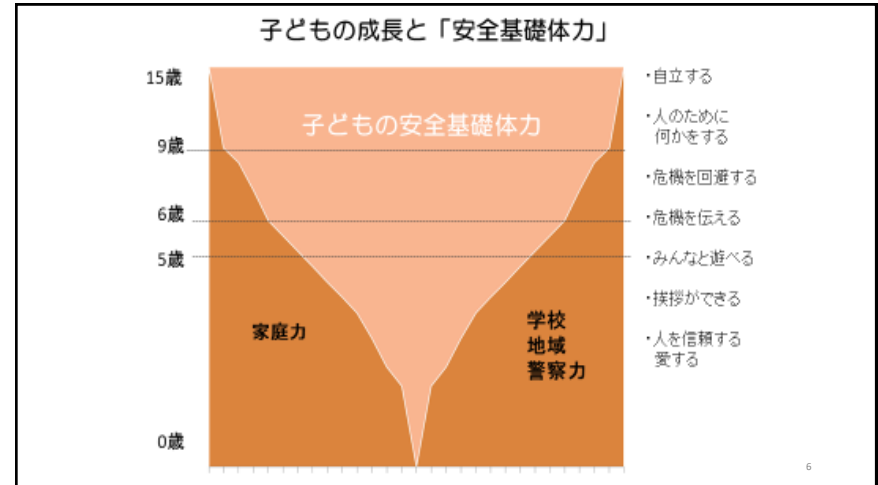
4

●子どもと大人の境界線

- 自己配列力、自己選択力、自己決定力、自己責任力の、これら4つの能力を簡単に言えば先述の通り、自己防御 (self defense) のための「自律的に自分で判断する力=状況判断力」と「意思決定力」ということであり、英国の思想家J.S.ミル (John Stuart Mill) は19世紀初頭、こうした他者から指図されることなく「自分の基準 (standards) で行動・生活できる能力=意思決定力」を持った人間を「大人」と呼んだ。
- 近代以降の社会、特にヨーロッパ社会では、この4つの能力、特に自己決定力・自己責任能力に欠ける者を明確に「子ども」と呼び、そうではない能力を有する者、即ち「大人」とに明確に分けた。
- つまり迫りくる「自己防御を必要とする事態」に対し、その最適な問題解決手法を自分で並べ、自分で選び、自分で決め、その結果に対し責任を負えない者は大人ではない子どもだ、ということである。このことは、だから教育と保護がそうでない者に対し行われる必要がある、ということに通じて行く。
- 英国では、今日でも、一定年齢に達し義務教育を終えた者を「もう大人である」として扱い、義務教育を終えた瞬間から、そうした者がもし道を外れた行い (deviant) をした場合、その社会的あるいは法的扱いは「大人になり切っていない」と判断され「がらり」と様相を一変させる。
- 簡単に定義すれば「大人」とは、危機において自立的にそうした状況を乗り越え行動できる人間のことをいう。

出典：清永奈穂「犯罪から子どもを守る安全教育指導プログラムの開発とその効果に関する基礎的研究—小学校における体験型安全教育の構築を目指して—」2022、博士論文（日本女子大学）

5



6

	段階	大目標	小目標
幼児	前自助段階	精一杯周りからの愛を受け入れ信じることの出来る人が居ることを体得する	周りに甘え周囲の人を信じる力を付ける
園児	自助段階	自分自身の力で危機を乗り越える	自身の体力を身につける
小学生	共助段階	周りとスクラム組んで自分の危機を乗り越える	危機対応の知恵・知識力を身につける コミュニケーション力を身につける
中学生	公助段階	見知らぬ人の為に、見知らぬ人と手を組んで危機を乗り越える	大人力を身につける（大人になる）

2023/7/13 ©ステップ総合研究所 禁無断転載 ©Naho Kiyonaga 2008

7


### 発達段階による子どもの違い

- 年長（5～6歳）子どもだけで行動することは少ない
- 危機について想像ができる。
- 危機を自分の問題としてとらえることができる。
- 見よう見まねで体を動かすことができる。
- 勇気を出してやらなければならないことがあるということが分かる。

<この時期の子どもへの安全教育をする際に加味すること>

- 愛着の形成の時期にある/基本的な生活習慣の形成の時期にある/十分な自己発現と、他者の受容による自己肯定感の獲得（褒めること）/社会性の芽生えとなる遊びを通じた体験活動の充実（体を動かすこと、自他ともに大事な存在があることを体で覚えさせること）

8



**低学年（7～8歳）一人で歩いて登校、行動し始める**

- 危機により、自分の命が危うくなるのが分かる
- 危機は乗り越えられることが分かる
- しかし頭で分かったことをすぐに体で体現することは難しい
- 見ながら繰り返し行うと体得していく
- 社会にはルールがあることが分かる

<この時期の子どもへの指導に加味すること>

- 人として行ってはならないことについて（大人がやってはいけないこと）についての知識と感性の涵養（話を聞くときは聞く、やるときはやるなどのけじめをつける、）
- 集団や社会のルールを守る（防犯ブザーはふざけて鳴らさない、普段はかみついてはいけないなど）
- 自他ともに命は大切ということ

\*文科省資料をもとに作成


9

**・中学年（9～10歳）**

- 様々な危機へのイメージが容易になる
- その時どうすればよいのか考え、動けるようになる
- 判断力の形成が活発になる（様々な事例を基に客観的に考えられる）
- 他者への手助けが具体的にできるようになる
- 危機を乗り越えるための、体力、知識を十分備えることができる
- 距離感がわかってくる

<この時期の子どもへの指導に加味できること>

- 知識を与え、「自分で」考えるように促す、
- 付和雷同にならない、
- 自分の安全を確保しながら他者の命を守る行動を具体的に示す




10

**・高学年（11～12歳）**

- 自分の身の周りだけでなく、離れた地域の危機について考えられる
- 自分の身近な人だけではなく、高齢者や小さな子ども、障がい者の安全についても考えられる
- 自ら社会的な行為ができる（110番通報、見ず知らずの人に声をかけて助けを求める、または助ける）

<この時期の指導に加味できること>

- 瞬間ボランティアなどの活動について具体的に実践する
- 地域の安全について有効な手段を考える
- 能動的に社会に接することの良さを体感する
- 一方で、暴力的かつ強引な行為に対して知力体力を使って抵抗、乗り越えることを体得する



11

		「距離・間（ま）」を学ぶ	「見る・見分ける・感じる」を学ぶ	「話す・対話する」を学ぶ	「大人力」を身につける	「抵抗力」を身につける
幼稚園 子ども園、保育園 (詳細は別添参照)	年少・年中	人vs人の「個体距離」を学ぶ	「安全」の感覚を学ぶ	甘えて「会話する」仕方を学ぶ	自分の体や心がとても大事であることを知る	「暖かい手・視線」を「はずさない」を学ぶ
	年長	自身の「逃走能力」の限界を学ぶ	「危ない」の感覚を学ぶ	見分けて「会話する」を学ぶ	いやなことは断固として「キッパリ断る」を体得する	「ハサミとカミはお友だち*」の「カミ（簡単な抵抗の仕方）」を学ぶ（*走る、叫ぶ、見る、飛び込む、噛みつくなどの抵抗、はっきり断る、お友だちを助ける）
小学校	1～2年	1年	距離・間（4・6・20m空間）を「体」で学ぶ	「危ない人・場所」を見分けることを学ぶ	「知らない人」との話方を学ぶ	その行動がどういう結果をもたらすか「判断する」ことの大切さを学ぶ。
		2年	距離・間（4・6・9・20m空間）を「メートル」で学ぶ	見分けた「危ない人・場所」への適切な対応の仕方を学ぶ	「知らない人・危ない人」との話方を学ぶ	再度「ハサミとカミはお友だち」を体得する

12

3～4年	襲撃者の「動きのスピードの変化」を学ぶ	「見守り視線」の意味・大切さを学ぶ	「視線＝言葉」の交わり方を学ぶ。SNSの危険について学ぶ	判断するための「選択肢」を個々のケースに即して学ぶ。	再度「ハサミとカミはお友だち」の体得度を自身で評価する
5～6年	襲撃者vs被害者自身の位置の取り方（動き）を学ぶ	環境・状況の変化に伴う「危なさの変化」を見分けることを学ぶ	「強い・巧みな誘いかけ」への対応の仕方学ぶ。SNS・携帯等を経由しての会話やプライバシーの正接さ等「危険性」を学ぶ	その行動がどうい結果をもたらすかの「判断とその結果への責任の取り方」をケースに即して学ぶ。友達や下級生が困っていたらどうするか考え、動けるようになる。	「闘う」「抵抗する」の意味と方法を学ぶ。
中学1～2年	1年	集団vs個人（集団vs集団）の位置の取り方（動き）を学ぶ	「見守り視線・視線の配り方」の意味・大切さを学ぶ	SNS・携帯等を経由しての会話の「危険性」を学ぶ。SNSによる自画撮りなどの危険を学ぶ	共に「闘う」「抵抗する」の意味と方法を学ぶ。
	2年	「生活の間（お付き合い・近隣関係）の「間」の取り方を学ぶ	異文化を尊重する生活の「大切さ」と「注意」の見分け方を学ぶ		
中学3年	不審者・困っている人との「間」の取り方を学ぶ	外国での「危なさ」の見分け方を学ぶ		知らない人でも困っているようであればどう助けるか考え実行する	「困った人」への対応を学ぶ

13

## 英国安全教育事例

- イギリスでは、安全教育を、特に個人間の関係性を形成する「教育」（Relationship Education）として理解し直すことを唱導し、2018年から実施、寛容な心を持った人間に育て、より良い人間関係を築けるように育てる教育が始まった。幼児期のRelationship Educationに始まり、Sex Educationへと発達段階に沿って指導、さらにCitizenship教育へとつながっていく。

<理念を持った安全教育へ>

- この変化を具体的に表現するものとして彼らは、「SkillからKnowledgeへ」というスローガンを示す。単にばらばらとその場その場の状況に応じた技（Skill）の指導を行うのではなく、自分自身で考え行動するための確かな知識（Knowledge）が真の安全を個人と社会にもたらすのだという。（英国教育省安全教育担当官へのヒアリング 2017年10月 清永奈穂）

イギリスの最終目標は「市民を創ること（Citizenship Education）」にある。将来を担う大人の英国市民を「安全を通して体験的に育てよう」というのである。諸外国の歩みは早い。アメリカだけでなくオランダやドイツにも芽吹きつつある。

14

- 英国においては、政府＋地方自治体＋NPO＋各種ボランティア団体等が協同し、義務化した強力な教育活動を実施している。2019年段階では全国を8ブロックに分け、発達段階に即して、危機体験のための「大型体験施設」を作成し、そこで子どもに危機体験を行い、それによって「健全な英国国民になるための教育（Citizenship Education）」を実施している。（写真参照。英国安全体験施設。清永奈穂撮影）。
- この教育にも多くの問題と課題があるが、コロナ下にも関わらず内容やシステムを検討・変革し、着実に発展し充実させてきている（2019年に教育内容、一層充実のため国会審議）。

15

## 生き抜く力を付ける安全教育システム

安全教育実装化における学校—外部組織連携型パターン			
	連携主体	連携先	例*
1	学校主導パターン	教育委員会・大学・NPO・警察・企業	東京都区部等
2	教育委員会主導パターン	学校・大学・研究所・NPO・警察・企業	千葉県等
3	自治体主導パターン	教育委員会・大学・NPO・警察・企業	静岡県・さいたま市
4	地域住民主導パターン	大学・研究所・NPO・警察・企業	東京都区部
5	警察主導パターン	大学・研究所・NPO・警察・企業	愛知県警察・千葉県警察等

いずれも清永が監修者あるいは主導的連携者として2007～2020年10月12日に参加した事例の一部である

16

BO-KENあいち（2015年11月開催）  
（日本で唯一の施設体験型防犯講座 愛知県  
警主催）



17

参考：あぶトレ！

概要  
静岡県くらし交通安全課が実施主体で行う、体験型防犯教育。講師養成講習を受け、NPO法人静岡県防犯まちづくりアドバイザー協会から指導力を認められた、静岡県民が指導する。プログラム内容は弊所監修。  
H25(2013)年より実施開始。  
R5年度は県内211校で実施。

「あぶトレ」受講数の推移

・実行体制

（しずおか防犯まちづくり連絡会議発行：防犯まちづくりニュース No.163、2020、より作成）

18

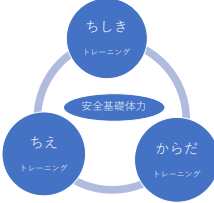
プログラム内容

次世代の地域の安全に参画する「大人」づくり

指導者が作り出す疑似的な危機遭遇場面の体験を通し、子ども自らが能動的に危機予測・回避・克服等の安全基礎体力を体得する。自助力のみならず、発達段階に沿って共助、公助の力を育む。



- ・危ない場所に関する知識（ひまわり）
- ・怪しい人に関する知識（はちみつじまん）
- ・危機に対峙したときの対応方法に関する知識（ハサミとカミはお友達）



- <課題>
- ・指導者の高齢化（若手指導者の育成）
  - ・講師のスキルアップ（授業の質の担保）

再現された危機の中で、得た知識をいつ、どのように、誰のために使うかを考える

20m走って逃げる・叫ぶなど、体を使って実践する

19

体験型安全教育を持続・普及していくために

1. 地域のこどもは地域で育てるという理念。
2. 先生方は教科中心。
3. 「安全基礎体力」の視点を先生方は持つだけでよい（添付資料参照）
4. 安全教育自体は地域や専門家が担う
5. 「地域のおんぜん先生」は各教育委員会もしくは危機管理課などが育てる。
6. その人材を教育委員会を通して園・小学校・中学校に送る。
7. 評価・効果は、学校、地域、教育委員会、市で共有。

20

			家庭・園における犯罪からの安全学習の一般的ねらい	家庭・園における犯罪からの安全学習の具体的内容	プログラム
0 ～ 3 歳	乳 児 ・ 幼 児	全 面 依 存 期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・信頼できる人がいることを感じる（子ども）</li> <li>・保護者も（特に第一子の場合）、子どもとは言っても一人の「人間」を育てていることを自覚する。</li> <li>・子どもが小さいうちに、あぶない場所、安全な場所、駆け込めそうな場所、人を見つける、見分ける。</li> </ul>	<p>&lt;前提&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・排泄、食事、入浴、遊び、など生活の中から温かい手、声がけ、眼差し、を感じ取り、信頼関係を培う。</li> <li>・子どもであっても、ひとりの人格を持った人間を育てる（胎内にいるときから）ことを自覚したうえで、声掛け、抱っこ、など日頃の生活の中で信頼関係を培っていく。</li> </ul> <p>安全な環境づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・改めて子育てしていく環境について、自ら安全に過ごすことを意識しながら考え、人間関係も構築していく（ご近所関係など）。さりげない・近隣の人、店、等の会話が、安全につながっていることに気づく。（無理に近づいたりしなくてもよい）</li> <li>と同時に、あぶない場所（公共交通機関や、人の多い場所、人気のない薄暗い場所、狭い道など）にも子どもを守るために気をつけることを学ぶ。</li> <li>・親にとっても「初めてのいってきます」の時期。</li> </ul>	<p><b>0才から1才児の基礎的安全力パワーアップ法</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① ゆっくり柔らかく温かい手、視線、声（特に授乳時の）などで子どもを包み抱きしめる（裏切ることのない信頼し愛し尊敬することの出来る人がいることを生理的に体得させる）。</li> <li>② 同様に子どものおむつ替え、入浴、水遊び時に子どもの身体、特に特定部位の扱いに注意することを話しかける（こういうことが将来の子ども自身の「私には大事な部分がある」という感覚形成につながる）。</li> <li>③ 小さく柔らかなボール転がしなどを行い、親子で遊びを楽しむ（喜びの交換・共有と、自分と物の間の基本的な「距離感覚」、特に動く物への生理的感覚を育てる）</li> </ol> <p><b>2才から3才時の基礎的安全力パワーアップ法</b></p> <p><u>&lt;家庭内生活でのパワーアップの心得&gt;</u></p> <p>●<b>子ども本人</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>④ 普段使う物で自分が必要だし大切な物は、自分でしっかり取り扱おうとする（それは自他を分け、自分の身体を大切にす、ひいては他の者を大切にすることにつながる）。</li> <li>⑤ 自分の物には、自分の名前を書いてもらう。</li> <li>⑥ その日にあったとても面白い・大切だと思うことなどは、おうちでお話そうとする。</li> </ol> <p>●<b>親・保護者</b></p>

出典：『初めてのいってきます！ サポーターズマニュアル第二版』（世田谷区,2022,清永奈穂監修執筆）、『いやです だめです いきません 親が教える子どもの安全教育』（岩崎書店,2022年,清永奈穂著）、『犯罪からの子どもの安全を科学する』（ミネルヴァ書房 2012,清永奈穂他）、NHK まいにちスクスク 赤ちゃんからの防犯教室（2023年4月28日～30日放送）、©Institute of Safer Town Environmental Program Naho Kiyonaga2022 禁無断転載コピー

				<p>⑦ 子どもの写真や動画をSNSなどにむやみにUPしない。する場合は、顔、、肌の露出、等に注意。また子どもの個人情報（特に名前、生年月日、住所、性別）を載せない。</p> <p>⑧ 我が子だけでなく、友だちの子どもの写真や動画も同様。特に友だち間でお誕生日会などの写真のシェアを勝手にしない。</p> <p><b>&lt;子どもを連れて近所をお散歩する。'あんぜんおさんぽ'&gt;</b></p> <p><b>お外では保護者やごく親しい者から離れて親が見えないところまで動き回らない</b></p> <p>⑨ その時、お話ししながらでも前を見ながらゆっくり歩く（前を向いて歩くことの大切さ、歩行時の段差や交通事故遭遇の危なさなどを教える）。</p> <p>⑩ その時、すれ違い時に「間」を取りながらすれ違うことの大切さを学ぶ（前もって「あいだ」を取り、不用意なすれ違い問題を避けることの大切さを教える）</p> <p>⑪ その時、知っている親しい人、お店の人、交番のお巡りさんなどにご挨拶するようになる（見守ってくれる人との「挨拶」を介した絆づくりの大切さ、絆の結び方を教える。逆に周りに見守り対象として認知・確認させる）。</p> <p>⑫ 同時に「知らない」のにしつこく話しかけてくる人、知ってても「イヤだ」と感じることをしようとする人、親と離し一人だけにしようとする人には、はきり「イヤです、ダメです、行きません」というを教える（将来の不審者＝変な人→あやしい人→あぶない人に備える）。</p> <p>⑬ 子どもに「すぐ目の前に居る人」だけでなく「少し離れた所に居る人」にも関心を寄せることの大切さを教える（将来の6m、20mの問題に備える）。</p>
幼	年	依	<p>・犯罪からの安全に関わる基本的な構えや知識・行動を身につける</p> <p>・自分や友達の「命」や「身体」の大切さ・かけがえのなさを学ぶ→親子のアタッチメントや、遊びのなかで</p>	<p>① 前方を注意しながらさっさと歩ける。</p> <p>② 嫌なことには「イヤです、ダメです、行きません」とはっきり言える。</p>

出典：『初めてのいってきます！ サポーターズマニュアル第二版』（世田谷区,2022,清永奈穂監修執筆）、『イヤです だめです いきません 親が教える子どもの安全教育』（岩崎書店,2022年,清永奈穂著）、『犯罪からの子どもの安全を科学する』（ミネルヴァ書房 2012,清永奈穂他）、NHK まいにちスクスク 赤ちゃんからの防犯教室（2023年4月28日～30日放送）、©Institute of Safer Town Environmental Program Naho Kiyonaga2022 禁無断転載コピー

稚園・保育園・認定こども園	少・年中	存期		・前方を注意しながらサッサと歩ける	③ 下着を着ているところは「むやみに見せない、触らせない」ということがわかる。
			・年少・年中さんとして本人に関する基礎的情報（個人情報）を身につける	・自分や保護者・園の名前、住所などがしっかり言える ・もらしてはならない基本的な個人情報のあることが分かる	① 自分の名前、保護者の名前をいうことができる。しかし誰にでも言うてはいけないことが判る。 ② しらない人には写真を撮らせない。
			・社会的コミュニケーションに関する基礎的力を身につける	・好きなことは好き、自分の物は自分の物と言葉や態度で表すことができる ・園の先生や近所の人に挨拶がしっかりできる ・読み聞かせを楽しむことが出来る→先生や保護者のお話を聞くことが出来る	① 園の先生、ご近所の人（よく親子であいさつする人）にご挨拶ができる ② 先生、保護者などのお話を（読み聞かせ）を楽しんで聞いたり見たりできる ③ 何か気になることがあったら先生、保護者などにお話できる。
			・年少・年中さん時における危機回避・克服に関する基本行動（その時どうする）を体得する	・一人で歩きまわらない・出歩かない・一人にならないなどの大切さが分かる ・「鬼ごっこ」などで自分の体力の限界が分かる	① 一人で歩き回らない、一人で、お出かけしない、一人で家から出ていかない、などがわかる。 ② 思い切り走ることができる。大人に追いかかけられると、追いつかれてしまうこともわかる。
年長	自助力形成開始期（接続期）	・年長さんとして本人に関する基礎知識（個人情報）を身につける	・とっさの時に自分や保護者・園の名前・詳しい住所、保護者の勤務先が言える ・個人情報を伝えてよい人・いけない人の区別ができる	<b>5才児あんぜんパワーアップ</b> ① おまわりさんや、園の先生には自分の情報を伝えることができる。 ② ただし、上記の人や家族以外に、大事な情報をつたえてはいけないこともわかる	
		・社会的コミュニケーション力を身につける	・知ってる人でも嫌なことは「イヤです」「ダメです」「行きません」と言葉や態度でしっかり伝えることができる ・その日の出来事や出遭った変なことなどを保護者や先生にお話できる	③ 「いやです、だめです、いきません」と言葉や態度でしっかりと伝えることができる。特に、下着を着ているところを触ろうとする、「見せて」という、だれもいないところに連れて行こうとする、二人きりになろうとする、「内緒だよ」というなどには、「イヤだ!」と言える。 ④ その日の出来事やであった変なことを保護者や先生にお話することができる。	

出典：『初めてのいってきます！ サポーターズマニュアル第二版』（世田谷区,2022,清永奈穂監修執筆）、『いやです だめです いきません 親が教える子どもの安全教育』（岩崎書店,2022年,清永奈穂著）、『犯罪からの子どもの安全を科学する』（ミネルヴァ書房 2012,清永奈穂他）、NHK まいにちスクスク 赤ちゃんからの防犯教室（2023年4月28日～30日放送）、©Institute of Safer Town Environmental Program Naho Kiyonaga2022 禁無断転載コピー



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・犯罪者及び犯罪者行動に関する基礎知識を身につける</li> <li>・何が変なことあやしいこと危ないことかの基本を自分で判断できる</li> <li>・年長さん時における危機回避・克服に関する基本行動（その時どうする）を体得する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・怖い人（犯罪者）の基本行動（何メートルから注視するか等）の中でも特に重要な行動を学ぶ</li> <li>・走って逃げる、大声をだす、ブザーを鳴らす、ジタバタする、腕ブンブンする、すり抜け遊びなど「その時どうする」基本行動を学ぶ</li> <li>・どんな子が狙われやすいかを学ぶ</li> <li>・犯罪が起りやすい場所を学ぶ</li> <li>・どんな人が危ない人かを学ぶ</li> <li>・明るいことは必ずしも安全ではない（犯罪者はやりやすいと思えばどこでもやる）ことを学ぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑤ 「はちみつじまん」（あやしい行動の見分け方の標語：しつこく（は）なしかけてくる、ぐんぐん（ち）かづいてくる、（み）つめてくる、（つ）いてくる、（じ）っと（ま）っている、ん？と注意）の中でも特に「しつこくはなしかけてくる」「ついてくる」「じっとまっている」という者には注意することがわかる。</li> <li>⑥ おおきな声を出すことができる</li> <li>⑦ おしりをつけてジタバタすることができる</li> <li>⑧ 腕をぶんぶんすることができる</li> <li>⑨ ぐっと近づいてきたときに、一歩離れることができる</li> <li>⑩ ポツンとした灯があぶないことを知る</li> <li>⑪ ぼんやり、フラフラ、ウロウロ、キョロキョロしていると危ないことを知る。キョロキョロしてもよいけれど、目の隅で前を見ることの大切さを知る。</li> <li>⑫ 一人の時でも6メートル前後はしっかり見て歩けるようになる</li> <li>⑬ お家に入る前に、後ろを振り返って（だるまさんが転んだのように）、ついてくる人がいないか、確認してからお家に入る。入ったらすぐにドアを閉めて鍵を閉める。</li> <li>⑭ 家に入ったら「ただいま！」が言える。</li> <li>⑮ お留守番するときのルール（ピンポンが鳴っても出ない、または「お母さん今忙しいので」、という。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・犯罪からの安全基礎体力の体得程度の測定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・犯罪からの危機回避・克服の「力」の付き具合を計る</li> </ul>	

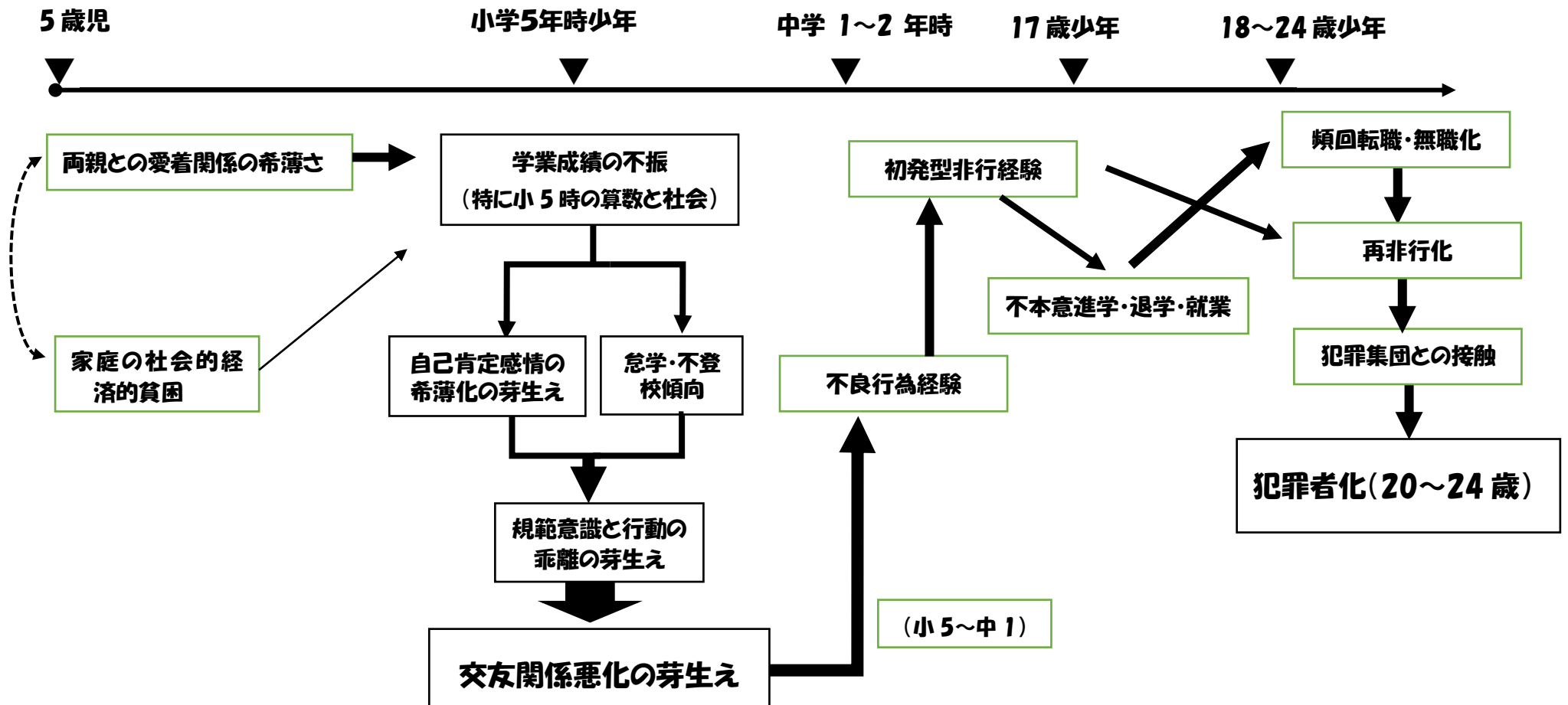
出典：『初めてのいってきます！ サポーターズマニュアル第二版』（世田谷区,2022,清永奈穂監修執筆）、『いやです だめです いきません 親が教える子どもの安全教育』（岩崎書店,2022年,清永奈穂著）、『犯罪からの子どもの安全を科学する』（ミネルヴァ書房 2012,清永奈穂他）、NHK まいにちスクスク 赤ちゃんからの防犯教室（2023年4月28日～30日放送）、©Institute of Safer Town Environmental Program Naho Kiyonaga2022 禁無断転載コピー

資料

青少年の再非行化過程の因果モデル(科警研報告+統計研究会+1994年放送大学講義資料より)

～コーホートデータ分析～

(株)ステップ総合研究所長 教育学博士 清永奈穂



1. 線の太さは因果の強さを表す